

## 「おくのほそ道」の終焉

—武生から大垣まで—

松 尾 靖 秋

「おくのほそ道」における芭蕉の行動に関しては、江戸を出発してから東北、北陸にかけての部分、即ち山中で芭蕉と別れるまでは、周知のように、随行者の曾良が克明に記録にとどめたいわゆる「随行日記」によって、その消息をつぶさに知ることができるのであるが、山中から最後の地大垣までに関しては、芭蕉の動静に不明なところが少なからずあって、推測の域を出ないものが多い。今夏私は、早稲田大学の安藤常次郎教授、岐阜大学の松井利彦講師両氏とともに、福井県武生から岐阜県大垣までの区間を限って、二三重点的に調査する機会を得たので、その結果について、ここに報告の筆を執ってみたい。

曾良の日記によると、元禄2年8月5日の項に次のように認められている。

1 五日朝曇、昼時分、翁、北枝、那谷へ趣。明日、於小松ニ、生駒万子為出会也。

□□□則請ジテ帰テ、良刻、立。大正侍ニ趣。全昌寺へ申刻着、宿。夜中、雨降ル。とある。即ち曾良はこの日芭蕉と北枝が昼頃たって那谷へ行くのを見送ったのち、1時半ごろ山中をたって大聖寺へ向ったことが知られる。その後の曾良の行動は、彼自身の日記に明らかであるが、芭蕉の行動については「おくのほそ道の」本文によって知るほかはない。従って詳細については一切分明的ないが、そのころの街道の状況その他を考え合わせると、やはり曾良のたどった道を追って行ったのではないかと考えさせるものがある。

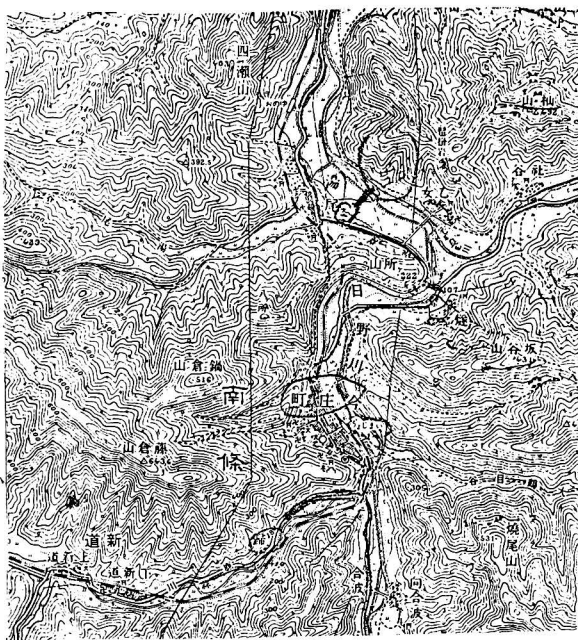
7日に全昌寺をたった曾良は、吉崎、塩越、北潟、金津、森岡（丸岡あるいは森田であろうとされる）を経て8日には三国海道を福井に出、符中（いま武生）を経て今庄に到着している。一方芭蕉は紀行本文によれば、全昌寺をたってから吉崎、汐越、丸岡とたどって福井に出ているから、曾良のたどった道とほぼ同様であると考えて差支あるまい。「おくのほそ道」の本文によれば、福井をたって後のことについては次のように書かれている。

漸白根が嶽かくれて比那が嵩あらはる。あさむつの橋をわたって、玉江の蘆は穂に出にけり。鶯の関を過て湯尾峠を越れば、燧が城かへるやまに初雁を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。

## 「おくのほそ道」の終焉

即ち福井から敦賀への道中については極めて簡略な、ただこれだけの叙述しかないが、ここで今回の調査をもとに曾良の日記を勘案しながら、芭蕉の足跡をたどってみることにする。

まずここに見える「あさむつの橋」は、「枕草子」に、「橋はあさむつ」と書いているように、古くからあまねく知られていた橋であったようで、「方角抄」にも「朝むつの橋はしのびてわたれどもとどろとどろとなるぞわびしき」や「たれぞこのねざめて聞ばあさむつの黒戸の橋をふみとどろかす」などの歌が引かれていることからそれが証せられるが、その著名な所以については知るよしもない。後世になると、「太平記」にも義貞の妾匂当内侍局が浅生水の橋を越えたというような記事が見えるので、いっそうこれがあまねく知られるようになったのであろう。現在は足羽郡麻生津村大字浅水のことであろうとされている。次に玉江については、今の福井市花堂町江守町から足羽村江端地方にかけてのことであろうとの説があるが、石川銀栄氏もいわれるように、(越前俳諧叢書)芭蕉の当時果して「玉江の蘆は穂に出にけり」というような状況であったかどうか、疑問に思われるふしもある。「おくのほそ道」で随所に見られる虚構からしてもそれを想像するにたたくない。鶯の関は、いま南条郡湯尾村と鯖波との間に2, 30戸の小部落があって、関ヶ鼻といっているので、このあたり



第 1 図

のことであろうと考えられる。吉田東伍の地名辞書によると、「今湯尾村と云ふ、今庄駅の北一里、其間の小嶺を湯尾峠と云ふ。古書或は柚尾に作る。寿永延元兩度の古戦場にして、燧城址、柚山等相接す。」と見え、「菅菰抄」には、「わづかなる山にて嶺に茶店三四軒あり、何れも孫嫡子御茶屋と暖簾にしるして、其子孫なるものはもがさのうれへなしと云伝ふ。孫嫡子とハ其子孫の嫡家と云事なるべし。」といっている。ともかく古来

要衝の地であったに違いない。第1図に見られるように、湯尾村の附近を流れる宅良川に沿って山の端を迂回する道があり、更に日野川に沿うて今庄に入るのが通常で、いうまでもなく平坦な道であるが、およそ3倍の距離になるために、間道としてこの峠道は多く用いられたものであろう。芭蕉はこの峠の句を一句残した。

# 湯 尾

月に名を包みかねてやいもの神

というのである。ところがこの句について、前大垣図書館長大野国比古氏が近年大垣宮崎家（芭蕉門宮崎荊口の子孫）で発見された懐紙1冊（仮称「荊口句帳」）に見えるこの句には「木ノ目峠いもの神やど札有」との詞書が附されていて、（木ノ目峠のことについては後にふれるが）この句をどのように解するかやや疑問がないでもない。しかし前述のように、湯尾峠の茶店でいもの神の守り札を売っていたという古い所伝のあるところから、この句が湯尾峠での句であることはまず動かせないとするならば、「木ノ目峠」としたのは芭蕉、あるいは荊口の錯覚であって、却て芭蕉が木ノ目峠を通ったという証拠を示すものであるということにもなろう。

さて、日記を見ると、9日の条に次のように見える。

- 1 九日快晴。日ノ出過ニ立。今庄ノ宿ハヅレ、板橋ノツメヨリ右ヘ切テ、木ノメ峠ニ趣、谷間ニ入也。右ハヒウチガ城、十丁程行テ、左リ、カヘル山有。下ノ村、カヘルト云。未ノ刻、ツルガニ着。（下略）

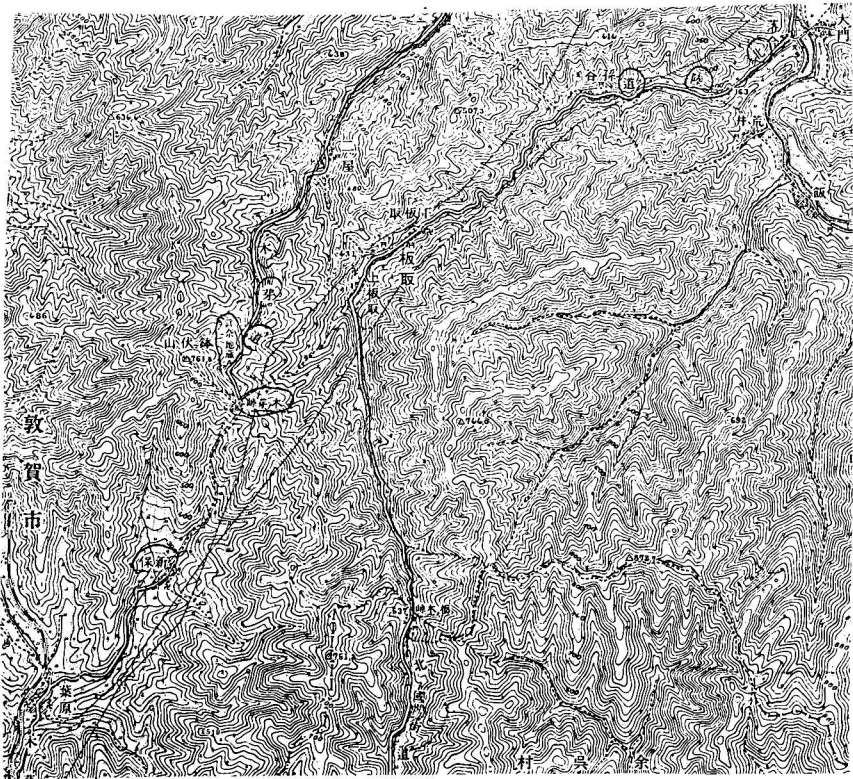
この記録を見ると、今庄を出発してのち木ノ芽峠への道に出てから右に燧が城、左に帰山があるようにいっているが、これは事実とは相違している。即ち燧が城址は湯尾と今庄とのちょうど中間、日野川を渡るあたりの左手に聳える山上にある。帰の村は、今庄から北陸道を半里ばかり南下したところで北陸道に別れ、西の方山あいの道を更に半里ほど入ったところにある、山ふところに抱かれた小部落である。こうしてみると、「随行日記」はまことに丹念な記録で、内容そのままに事実と考えてもよさそうであるが、若干このような過誤が他にもないではないということを推察せしめるものがある。

燧が城は「菅菰抄」に「湯尾の向ひの山にて木曾義仲の城跡なり、云々」とあるように、寿永2年木曾義仲の軍が陣をかまえたところだと伝えられる。吉田東伍の前引書には「今湯尾村の大字燧にある歟。名勝志に今庄駅の巳午の方三町許の山上に在りと云り。又火打に作る。云々」と見える。武門出の芭蕉にとってみれば、義仲については特別の関心があったにちがいない。「義仲の寝覚の山か月悲し」と詠んだ彼の心中をも察することができるように思われる。また、前記の「かへる山」は「菅菰抄」

「おくのはそ道」の終焉

によると、「本名は海路山なり。さるを海路の字を誤り、遂に音を転譌して帰山と称す。名所なり。」といい、「たちわたる霞へだてて帰る山来てもとまらぬ春のかりがね」（続拾遺）その他をあげている。吉田東伍の「地名辞書」にも、「和名抄、敦賀郡鹿蒜郡、訓加倍留。（中略）帰山、又還山につくる、鹿蒜村二屋より杉津浦に至る山路を云ふ歟、古の北陸道之に係由す。」と見える。「和名抄」に見えるところからするとかなり古い地名であることが知られるが、更に、「紫式部日記」や「後撰集」にも見えることによっても、往古より歌枕として知名であることがわかる。歌枕をたずねることがこのたびの旅の目的の一つであった芭蕉にとってみれば、この地についても特別の関心があったものにちがいない。

さて、今庄から敦賀に出るには二つの道が考えられる。一つは、栃の木峠を越えて琵琶湖北岸の木の本へぬける北国街道を上板取まで行き、ここから尾根伝いに木ノ芽峠に出て、新保を経ていわゆる木ノ芽道に合流し、敦賀へとたどる道であり、いま一つは、今庄を出て間もなく西の方向に折れ、鹿蒜川に沿って行き、帰の部落を通りぬ



第 2 図

けて木ノ芽道を行くという方法である。(別掲第2図)両者を比較すると、たしかに前者の方が距離的には短かいが、上板取から木ノ芽峠への道が難路であったので、やはり曾良の日記に見える道を芭蕉もたどったということは想像にかたくない。前記資料「荊口句帳」中の「芭蕉翁月一夜十五句」(第3図参照)に「越の中山」と前書する芭蕉の「中山や越路も月はまた命」の句のあることがこれを証する。「越の中山」については「倭漢三才国会」にも「在<sub>ニ</sub>有乳山之艮<sub>ニ</sub>、過<sub>ニ</sub>木目峠<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>府中<sub>ニ</sub>之処也、東<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>ケ<sub>ニ</sub>則至<sub>ニ</sub>帰山<sub>ニ</sub>、云々」と見えている。



第 3 図

9日の早朝今庄を出発して未の刻(午後2時頃)敦賀に到着した曾良は、日記に見えるように、早速気比神宮に参拝し、唐人が橋の大和屋久兵衛方に宿を借り、食事後金ヶ崎宮に参詣して、山上まで24,5丁を登り、夕方帰るとすぐさま船をかりて、海上4里ほどを色ノ浜の本隆寺に至って宿泊している。大変な健脚ぶりである。のちに敦賀に到着した芭蕉も本隆寺を訪ねているので、芭蕉と曾良との間には、本隆寺参詣のことについて前もって計画のあったことが推察されるが、芭蕉も「おくのほそ道」に書いているように、「わびしき法華寺」であった同寺に、どのような必要があって赴いたものであろうか。ここで想起されるのは、山中における芭蕉と曾良別離についての一件である。

芭蕉は「おくのほそ道」の山中の条で、周知のように、「曾良は腹を病みて伊勢の国長島といふ所にゆかりあれば、先立て行くに」と簡略に記している。しかし曾良は自身の病気のことについて、日記に記するところはなく、そうした様子も全くないと考えられるところからしても、また、事実、身体に変調があったものとすれば、本隆寺に立寄るというような迂回をすべきではなく、一日も早く長島に直行することが常識であるということからも、やはり山中の「腹を病みて」の一条は、芭蕉の作為と考えるより他ないように思われる。「おくのほそ道」の随所に見られる芭蕉の虚構がこ

### 「おくのほそ道」の終焉

こでも認められるということができよう。本隆寺は、桓武天皇の延暦年間の創建と伝えられ、もともと金泉寺といい、曹洞宗永厳寺（敦賀）の末寺であったが、応永33年、法華宗に改宗し、名も本隆寺と改められたものであるという。しかしこの地が格別名所というものでもなく、本隆寺にしてもとりたてていうほど由緒のある寺でもないといふところからすると、この参詣には大した意義が認められない。ただ、この地に産するますほの小貝が「山家集」に「汐そむるますをの小貝ひろふとて色の浜とやいふにやあるらん」と見えるところからして、芭蕉の西行への特別な関心と憧憬が、彼を種の浜へとかりたてたのかもしれない。

「おくのほそ道」には「十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ」とあるので、この部分については一応信をおいてよいと思われる。即ち敦賀で中秋の名月を見ようというのが芭蕉の念願であったにちがいない。ただし、曾良は5日に山中を出発してその夜は大聖寺町の全昌寺に泊り、芭蕉も「おくのほそ道」に「曾良も前の夜此寺に泊りて」といっているのので、これを信ずるとすれば、芭蕉も6日にはここに泊っているのであるが、その後曾良は9日敦賀に到着するまでわずかに4日しか費していないところを、芭蕉は14日の敦賀到着まで、約10日の間をどこをどのようにたどったものか、かりに曾良の足跡を同じくたどったとしても、どこに数日の滞在をなしたか、そうしたことは後考をまつより他にない。ついでながら、曾良は翌10日、隣家の出雲屋弥市良を訪ねて、芭蕉に渡してくれと金子一両をあずけていることが日記によって知られるが、敦賀まで来た曾良にとっては、この後の大垣まで、路銀にもさして困ることもあるまいということで、金子を渡すことにしたのかもしれない。

11日敦賀をたった曾良はその日の4時ごろ木ノ本に着いている。これは最短距離の塩津街道をたどっていることを示すものである。翌日は木ノ本から北国街道を長浜に出て、そこから便船によって彦根に出、鳥居本に至って1泊し、翌13日は、鳥居本から摺針を越えて関ヶ原に至って宿し、翌14日、関ヶ原から野上、垂井を経て大垣に到着した。この間3日を要している。芭蕉もこれまでの行き方からすれば当然曾良のあとを追うべきであるが、敦賀、大垣間のことに関してはやや事情が異なるように思われる。芭蕉が曾良の足跡をたどったということについては、全くその痕跡が認められないからである。いまこれについて考察を進めてみようと思う。

「おくのほそ道」によると、「露通も此みなとまで出むかひて、みのの国へと伴ふ、云々」とあるように、路通は敦賀まで出迎えて大垣へと芭蕉の東道をしたわけであるが、2人は曾良と同じように北陸街道を木ノ本まで来て、ここから本街道を長浜に出るか、あるいは脇街道を行くか、というようなことで岐路にたったにちがいない。そ



してやはり脇街道をたどることとしたもようである。それは大垣への最短距離であるとともに、大野国比古氏も指摘されているように、美濃人としては脇街道を通るのが常識でもあったからである。美濃に住んだ路通はこの常識に従ったにすぎない。長途の旅を続けた芭蕉にしてもその方が望ましかったのであろう。そして郡上・伊部・佐野・今莊・小田・春照・大清水と経て、藤川を通り関ヶ原へと出た。いうまでもなく関ヶ原は中仙道の宿場である。脇街道は、左手に伊吹山を仰ぎ見ながら、その麓をめぐるように延々と続いている。のちに斜嶺亭において芭蕉の詠んだ「戸を開けばにしに山あり、伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の徳あり」の詞書を有する「其まゝよ月もたのまじ伊吹山」の句は、道中で間近に眺めた伊吹山の印象があざやかに彼の心によみがえっての作にちがいない。

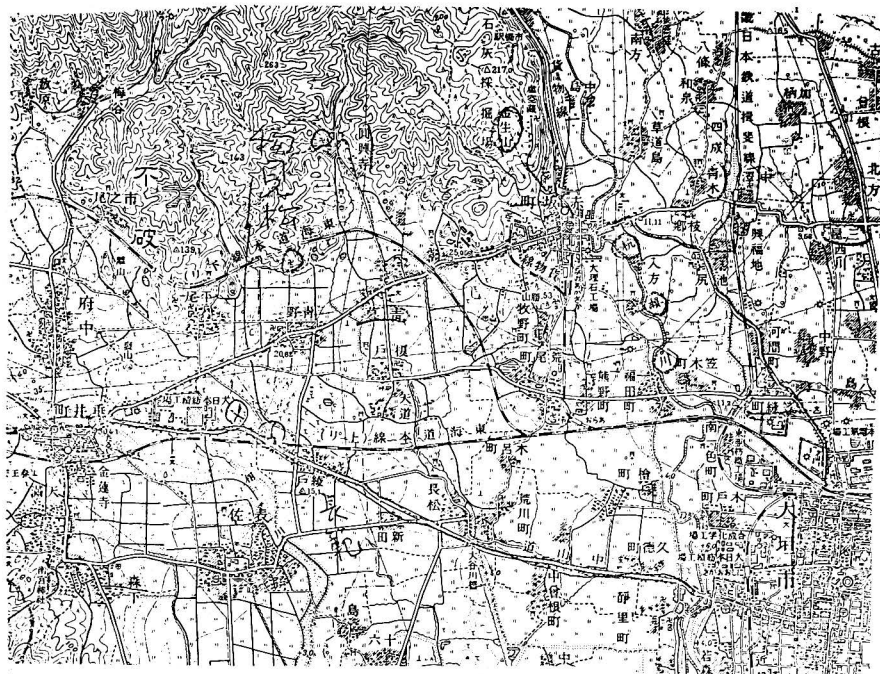
関ヶ原は芭蕉にとってははじめての地ではない。貞享元年の「野ざらし紀行」の旅では「秋風や藪も鳥も不破の関」と詠み、元禄元年には「ところどころ見めぐりして、洛に暫く旅寝せしほど、美濃の国よりたびたび消息有て、桑門己百の主、道導せむとて、訪ひ来りて」の詞書をもつ発句と脇とをのこし、己百の「導して見せばや美濃の田植歌」の発句に対して芭蕉は「笠あらためむ不破の五月雨」と脇をつけているところを見ると、この折にも関址をたずねたものであるようである。

こうして芭蕉と路通とは垂井を経て、赤坂町に出たと想像される。垂井には門人の市隠が住み、赤坂には木巴の家があったから、この道を通ることは、恐らく路通の考えによったものであったと思われる。前記大野氏によれば、木巴亭は赤坂の旧家で、その師木因も祖先は赤坂の出身であったといわれている。赤坂での芭蕉は同地の金生山頂にある明星輪寺虚空蔵に参詣している。（別掲第4図）「赤坂の堂虚空蔵にて、八月廿八日 奥の院」との詞書をもつ「鳩の声身に入わたる岩戸哉」（漆島）の句のあることによって、それが証せられる。

但しこの詞書の「廿八日」についてはやや疑問も存するので、後述する。明星輪寺は真言宗真義派に属し、通称を赤坂虚空蔵といい、日本3虚空蔵の一つといわれている。標高300メートルほどの山であるが、道が急峻なため、登るにはかなり困難が伴う。山上の境内は広いが、訪ねる人もなく、静寂そのもので今にしてこの句のおもかげを伝えている。

こうして芭蕉はこの地を最後に大垣入りをするわけであるが、ここで更に「おくのほそ道」の本文を引用すれば、「駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来り合せ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集る。」とある。赤坂から大垣までは、1里余の道程であり、「駒に云々」はこの間のことをいったものであろう。このよう

「おくのほそ道」の終焉



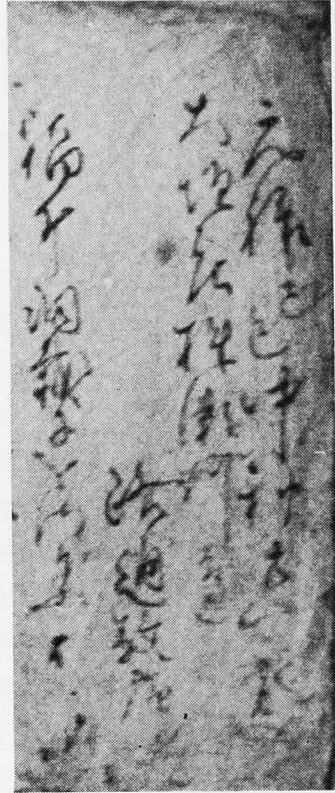
第 4 図

に考えれば、金生山虚空蔵の参詣が、あるいはこの日の午前中のことであり、大垣到着はその夕刻のことであったとすることも、あながち無理ではないようである。

さて、芭蕉の大垣入りの日時については、前引「荊口句帳」の発見によって、8月28日のこととされるようになり、定説となりつつあることは周知の通りである。しかもこれを裏付けるのが、前記の「鳩の声」の句の詞書に見られる「八月廿八日奥の院」の文字である。しかし、敦賀から大垣まで、曾良がわずかに3日しか要しなかったところを、芭蕉が16日あるいは17日に敦賀を出発したと仮定しても、何故に10日余の日数を費さねばならなかったのか、という疑問が依然として残らざるを得ない。敦賀での滞在が数日に及んだか、あるいは赤坂木巴亭に数日を滞在し、長途の旅の疲れを医したもののなのか、そのいずれかになるとも考えられるが、終着点を目前にしている芭蕉の心情を察すると、これもやや不自然のようである。こうした私の疑問に解明のいとぐちを与えられたのが、最近発表された松井利彦氏の説である（北陸脇街道と芭蕉「俳句」昭・43・11月号）。即ち同氏は前記「荊口句帳」の巻頭に見える部分（拡大図版第5図参照）を「元祿己巳中秋廿一日以来、大垣庄杭瀬川辺路通敬序」と解説され、従来「廿八日」としてあったものを「廿一日」と訂正するという新見を打ち出されたのである。同氏は同句帳に見える「一」の文字について、つぶさに検討された結果、こ



れは明らかに「八」ではなくて「一」であることを結論されたものである。今夏私も大野国比古氏の厚意によって、大垣図書館においてこの句帳を検討する機会を与えられて以来、この点について疑問を抱きながら今日に至ったわけであるが、いまその折の写真について、私なりに再び詳細に検討した結果、ますますこの感を深くした。21日ということにすれば、敦賀大垣間が4. 5日ということになって不自然さは氷解する。但し、これですべてが解決したかという、そうではない。前引の虚空蔵での句の詞書の「廿八日」の文字についての疑問である。敦賀大垣間の日程と、句帳の文字とを考えあわせると、「漆島」の誤記というより他ないし、宝永3年「漆島」に芭蕉の逸句を収載の際、あたかも今回の句帳読解の際と同じようなことがあったものか、この間の事情については判じうべくもない。このことについては松井氏もふれておられないが、やはり後考をまたねばならないであろう。しかし、現段階においては、少くとも芭蕉の大垣入りを8月21日と考える方が蓋然性があるのではないかということを私は考えている次第である。



第 5 図

附記 本稿は昭和43年度特別研究費による調査をもととして成ったものである。

(本学教授・日本文学)